悪魔の國

はくさう

一幕一場。

登上人物。

盲目の僧侶。

艶なる女。

一の小僧侶。

二の小僧侶。

巡禮の女。

四人の漁夫。

場所。

海に面せる寺院の前。

時。

現代。晩秋の一夜

左方一面鏡の如き海にして涯際なし。右手に寺院の門ありて觀客に對し海の砂原と等分に觀せしめ寺院の塀は舞臺面を斜に横斷す。門前既に草原にして雜草茂り砂原に續かしむ。砂は海鳥の羽の如く白く海岸は遠く緩く回つて觀客席の左方まで皆砂原と見なす。寺院の周り(海に面せる方をのぞき)皆鬱蒼たる深山をめぐらす。太古の如き沈默。舞臺一面薄明にして青白き月光に滿たしめ海上遥かに漁火の列を見れども事件の進行につれ漸次消失せしむ。中央に赭色の膚をもてる松の木あり薄明の中にも恐ろしきまで黑き影を印す。

二人の漁夫黑衣して寺院前の砂原に焚火して沖の舟の歸りを待つ。黑衣を着し沖を眺むる風情。年齡共に四十を出でず。暗き所に立つも敢に顏貌明かならず。月光淡し夢の如き思ひを起す。

一の漁夫。夜の闌けるにつけ風も歇み浪も立たずに結構だが寒さは愈寒い一體何時頃に沖の舟は歸るつもりだらう。(二の漁夫の薪を取つて火に入るゝを見て)いゝよ。あゝそれでいゝ。燃して終つては、あとの同輩が迷惑だ。

二の漁夫。ほんに何でかう遲いのだらう。——(間)——星が光つてゐる。青いいけすがない星が何と意地の惡い星なんだらう。

一の漁夫。あゝ。あれは善くない星だよ。何でも事のある前の星だつて云ふことだ。あれが出ると惡い魔が出るてゐ事よ。

二の漁夫。どうしたのだらう早く歸れは好いに。(間)まあ何と云ふ靜さをんだらう。聲もない音もない響もない。あの大きな青い唇を天につきつけて高鳴つた海もまた山も二度と覺めないやうな深い睡眠

を貪つてゐる。――木も草も石も水も。なんと云ふ靜さなんたらう。

一の漁夫。（默然として暫く佇立し）恁うしてゐると俺れの耳は聾のやうで俺れの口は啞のやうだ。（耳を傾けて）が何か泣いてゐるやうな聲が聞ゐるのではないか。何だかかう赤子のやうな――大人のやうな……否や否や何だか分らないが確に聲だ。――

二の漁夫。成程（頸を垂れたるまゝ）。而しそれは御まへの心の聲ぢやないか。三千か何千か分らないが網のやうな身体中の血管に赤い血が囁く聲ぢやないか。

一の漁夫。さうかな。いやさうではあるまい。（間）分つた。是の山越へて向ふに遊女町があつたらう。

二の漁夫。うむ。あるある大ありさ。！

一の漁夫。樂く刺戟された肉塊の緊張より發する歡聲とその飽合を見て嫉む靈のすゝり泣きさ。

二の漁夫。俺れにはたまへの云ふことは何のことだかさつぱり解せぬ。あれは犬の泣聲だ。それに違ひない。そうきめた方が俺れには安心だからな。

是の時背面の寺院の方より薄を分けて來る二人あり年一人は二十近く一人は十二三と見ゆ白裝束に黑き袴つげたり。二人は漸次漁夫の後より登場。二人共聲色高調にてはきはきとして心地好し。

一の小僧。俺れは何だか今日は魔かさしたやうに自分の足音が恐ろしい。白い、白い人骨の摧けたやうなこの落葉か立つる音、が軟かい夢でも搔き亂すやうだ。

二の小僧。あなたは足音が恐いと言はれるが私は私のこの聲音か恐しい。聲音か起す木靈を聞くと猶恐しい。（間）私は路に散り敷いた夏の取り落した落葉を見るとあのいつかの夏來られたあの遠い遠い海の

姉さんの姿が見ねます。あの美しい唇が含んでゐる微笑を見ると私は温かい物に抱かれるやうな氣がします。何故に和尚さんはあの人をそのご呼びにならないのでせう。(耻らふ如き面もちにて一の小僧の袖に隱る)

一の小僧。和尚さんは盲目だ。知つてゐるだらう、盲目は人間の最も安全の港ださうだ。

前の漁夫是の聲を聞きつけ燃へ殘の松をかゝげて見る。

一の漁夫。誰だ。

二の漁夫。(呟く者のことぐ)足音ばかりで聲かない。

二人の僧の間に笑ふ聲す。二人焚火の邊に出で來る。

一の漁夫。御前さん達か、誰れかと思つたら……。

二の漁夫。薪を入れてま少し燃さうわい寒くてしやうがねねな。

薪、一しきり高く燃へ上る紫の烟あたりを罩めて朦朧たる波紋を爲す。

一の漁夫。月は愈々傾いた。鉛色の海の舌は重くるしげに磯を何度となく嘗め盡したけれども舟はまだやつて來ない。櫓の響がもう聞えさうなものだな。

二の小僧。(深く何物か聞ものゝ如く)聞ねる、聞ねる櫓の音が。何てエまた重ぐるしい音なんだらう鉛の水を搔いてゐる樣だ。

二の漁夫。俺れにはまた何も聞ねない。俺の耳は不具なのか知らぬ。

一の小僧。(二の小僧に向ひ)御まへの聞ねると云ふのはあれは獸の吐息だ。(指さして)彼の山の奥の池の畔

に齒を磨き乍ら吐息してゐる惡魔の吐息だの人間の肉の香にも飽いた惡魔の明白から何を初め樣とのあてもない吐息なんだ。大分、世の中の人間相手の强迫にも飽いたんだらう。

沖の漁火次第に消ゆ去りて殘り少なく月愈傾きて四面より迫々に圍迫り來り焚火の烟、光る、こと甚だし。

二の漁夫。沖の漁火も殘り僅か三つに成つた。あの三つの一が俺らの同輩のだ。

漁火一つ消ゆ、

二の漁夫。また消ゐた。狐の嫁入に先驅ける提灯のやうだ。鷲か蛇を搔い浚ふやうに一體のあの漁火は海かのむのだらうか、天か吸ふのだらうか。不思議だ。

一の小僧。何不思議もない。漁火の明滅は池の畔の惡魔の一呼吸なんだ。

是の時右手の草叢より二人の漁夫現る。同じく黑衣ふつぎ繩を以て帶とし青き顏は死人のそれの如く全身震へて齒頭合せず。言語出ですして暫時默す。

二の漁夫。何時歸つた。何時歸つたと云ふのだ。何故默つてゐる、死人の顏のやう青ざめてその樣は何た。——啞になつたのか。恁う言ふ言葉が聞ゐぬのか。一寸あれを見いあの星を(星また異樣に輝く)怪しい星だな。あの星の出る時は惡魔か蒼白い縞の肋骨をたゝき、陰鬱な夢より覺めて樂む時ださうだ。それに數しれぬ小惡魔が今宵は知る限りの美しい歌を歌つて赤い血の葡萄酒に醉い乍ら魔女の捧ぐる赤い魚に舌鼓打つて世界に忘られた生活の歡喜を思ひ出す酒宴がある時ださうだ。俺れは御まへは最早や惡魔の餌と成りたゝせた頃と思つたに幸にも何時歸たつんだ。

二人の漁夫青ざめたる面を暫くして上げて。

三の漁夫。今その惡魔に出合つたのだ。

二の漁夫。その惡魔に。

四の漁夫。さうだ。思ひ出すだけでも恐くて仕方がない。赤銅盤やうな顏の中に陣どつたあの黑碼碯のやうな眼で俺いらの心を冷かに見通した。あの惡魔の眼――丁度俺れか沖から歸つて舟を磯につけるとあの磯に鼻のやうに横つてゐる岩の下に醉覺の水を飲んで居た。俺れか通りかゝると。――ぎろりと側面から俺いらを見たあの眼なんだ。大きい面積の廣いその焚火の焰のやうな舌を出してあたふたと笑つたあの口……。

二の小僧。恐しいことだ。あゝ恐ろしい(一の僧に)さあ惡魔に見つからない前に歸りませう。――うんぬんあほぎあべねるしやの……

三の漁夫。それは何の呪文だ。二の小僧。是れをとなへてゐる間は魔かつかぬさうださあ一所に――まかむだらまにはんどんじんばらはらまいた。うんぬんあほぎあ……

會話の間も暫く此の呪文續く。

三の漁夫。俺らはまた、いま一人の魔物に逢つた。是の魔物は銅盤のやうな顏も、焰のやうな舌も黑碼碯のやうな瞳も、もたぬがまるで水晶の屑に天鵞絨のやうな滑めたかさだ。

四の漁夫。御まへの話すのはあの美しい女性のことかい寺院の叢の方にまるで天狗のやうに飛んで行つた。

二の小僧。天狗のやうに。……

三の漁夫。あれだ、あの女性のことだ。俺らが花の宴や月見の會に、西八條の舘を天女のやうに盤紆つた素

足の搖に幾百の風雅の士を惱殺したことのある御曹子のきこなしのやうに見ねたあの女だ。

一の小僧。あの緋の袴に。……

三の漁夫。丈なす綠髮をうち嬲らして……

四の漁夫。沖から舟を歸さうとした時のことなんだ。今日に限つて風がない、浪がない、まるで盈水のやうだつた。――櫓を取つてこいでもこいでも舟は少しも進まぬ。水は鉛のやうに重くつて櫓が梓の弓見たいに曲つた。……でも一間二間と蝸牛りの雨滴たるゝ紅簷をはふやうに辿つたが駄目だ。舟がつくりと止まつて一寸も動かうとせぬ。殘念だ無念だつて思つて思ひの絆が切れやうとしたつて何かの約束のやうガタともせぬ。てつきり鮫類の惡戲と思つて舟底を破る程にたゝいたが駄目だ。駄目だつたんだ――傾く月に輝く水のみ舷にあたつて人を何と云ふ儚ない力だらう）と嘲笑ふのだつた、――が暫く微な光が水の上に漂つて朦朧たる物の象を唇氣樓のやうに顯したかと思ふと、透るやうな清い明な聲が「後生ですから私を磯までのせてください」つて俺れは悚然したんだ。黑い影がふらふらふらと動いて舟に來たのを見れば、……黑水晶のやうに濡をんた瞳。半透明な白魚のやうなた指。俺れは白狀するところ氣絕する程だつた……是れか話を聞いた人魚の親屬だと思つて……。

二の小僧。（一の小僧に向ひ）た寺の方に行つたと云いますからもしやあの美しい姉さんではないかと思ひます（此邊聞とれぬが如く低く）あの美しい姉さんですよあの夏の風に搖られながら緋の袴の裾をつまんで白い素足を誇り顏に去つた（間）「是の度はいつ來るか」と云つたら「百年してから」とさう、

きう、あの姉さんが言ひましたよ微笑んで美しい白い顔を二三度うち震はし乍ら。(半は獨言の如く)もう百年立つたのか知ん「百年てどれ長さだを聞いたら「一度緋の色に咲いた虞美草が散つて、その種子がまた生へて御まへが毎晩あの暗い燈火の影で讀む經本の長さ位になる間のことです」と姉さんは云つて呉れました。道理でもう百年はあの草莖が尺餘にぬんで私の眼をのぞき見るまに過ぎ去つたのです。正味に百年經るといかなる春の花でも時に依らず黑い夢を思はしめる凋落にせまつた秋の晩れの日でも咲せて見せるとのた言葉は欺りではなかつたのです。あの寂々しい寺院の庭をひき立てるやうなあの花の色は姉樣の御出でになるとの象だつたのです。百年て早いのものですね。姉樣は約束を守るかたです。(喜しき清調面に漲る)姉樣は人魚でも魔物でもない——魔物にしても可愛い人づきする色の白い魔物だ。

一の小僧。さう云ふとさうしたこともあつたね、俺れは忘れてゐた。(間)虞美人の赤い蕾も徐觸の欲しさうな熱い唇をほのめかしてゐる。俺れは初めは惡魔か啜つた青い血の滴りの凝つて成つた花とばかり思つてゐた。恁麼に早くあの女が來とは夢にだつて思はなかつたのだ。だか困ることがある。

二の小僧。困るて、私は決してあの人をのがししはしません。觸れ心地のいゝあの綿の膚は私の唯一つの隱れ塲です。宿命と云ふ恐ろしい蛇の顎から免れ得る唯一つのかくれがです。何で私かそれを棄てることが出來ませう。あの温い膚に觸れると私の心は熔けてあの人の心の中に流れ込むやうです。

一の小僧。困る。困る。御まへはどうも早熟だな。十五の年に間もあるのに戀と云ふていの知れぬ魔者の呼吸を吸つてゐる。あれは御まへから見ればた婆さんにも見にやうに。それに俺れはあれに接吻

の借金がある。

二の小僧。戀と、あゝ戀と歌姫の甘酒と云ふ戀とは姉さんのことですか(少しく耻ろふ貌)

此方に四人の漁夫焚火の圍りに立ち顏面火に輝いて赤し二の漁夫四の漁夫共に葦を吹かす傾きたる片破月は既に山邊の樹に懸る。

二の漁夫。(三四の漁夫に向ひ)たまへらはまだ震へてゐる。大低で止したらどうだ。見つともない。若い女性は何だが小僧侶達ちの知合のやうぢやないか。(一の漁夫に向ひ暫く凝視して)何故先きから默つてゐる。まるで啞のやうだ。それに御まへまでが震つてゐる。どうも不思議だな——。其麼に恐ろしい物があるかな。俺れの耳は聾で俺れの神經は緩漫なのか知らん。

一の漁夫。(首を垂れたるまゝ重ぐるしき調子にて)あれ、あれ、あれが聞ゐぬのか。風が林の樹木を吹いて散す木の葉が遠鳴るやうな角のない鈍いあの聲が聞ゐぬのかな。俺れにはそれが不思議でたまらない。(他の漁夫は)聞ゐるだらうあの惡魔の合唱する美しい歌が。

三の漁夫。聞ゐるとも。

四の漁夫。俺れにも聞ゐる。胸毛を搔きむしるやうに。

一の漁夫。さう、さう、惡魔の「美しい歌」とは人を悚然させるしろものぢんだ、人の心を抉るやうに。(間)またやつてゐあがる。糞！嗄れて出もせない黄ろい聲を出來るだけ張り出けて俺らを呪ふ氣だな。

「小さい米粒をつぶして釀した酒よりも

美しい女の肉塊の赤い血の滴の

白い膚に流れた、あの葡萄酒が、俺れの夢を。
俺れのあの黒くセピアがかゝつた夢の花を
よく騒がせやがつて面白い。
試みに俺れの裏山の倉庫の瓶を見るがいゝ、
一つ一つにまたとない美しい女がつめてある、
一人に五升の赤い酒が取れるとすると
十人につき五斗の割だ。殺さう、殺さう、生かすものか、
だがね……棚のフラスコに。大分ある。
あははは……たいじやうふ。
今夜もまた陰鬱な夢の精が泣くだらう
ヒヒヒヒヒ……と。』云つてゐる。

恐しい聲の響だな、(二の漁夫に)あれでも聞いぬと云ふのかいあ、あ、あれでも——さ！

二の漁夫。(默して首肯するのみ)

三の漁夫。あの聲を默つて聞いてゐると生汗が出るやうだ。歸らうや。

一の漁夫。(聞かざるものゝ如く)ことに依るとあの先きの美しい女性の魔の手に乘つたのではあるまいか……(間)さうすれば俺れは默つて卑屈にかまへる譯には行くまい。

三の漁夫。歸らうや。體の油の凍るやうな寒さだな。

四の漁夫。歸らう、俺れは今夜の中にあの魔の聲を忘れたいものだ。

一の漁夫。俺れはまア止さう用事がある。義務がある。

四の漁夫。義務つて寒さが身に泌むわあ。

二の漁夫。俺れも止さう歸るのは。惡魔の聲を聞くまでは歸らぬつもりなんだ。

三の漁夫四の漁夫徐々と歩を忍ばせて歸る寒さに震へながら。焚火の火殘り僅かにて暗さを增す。二人の漁夫の退場と共に海邊の方より盲目の僧、艷なる女登場。盲目の僧破れたる黑染の衣を着、古びたる藁の草履を穿つ。年五十に近く盲目なれども顏面美相なり杖もちて歩々遲々。艷なる女年二十五位。六波羅時代の御曹子の裝束。盲目の僧の手をさる。

盲目の僧。(歩み乍ら)俺れの知識は廣遠であるかも知れぬ。俺れの頭腦は明晰で讀み覺えたる法華經は一字の誤なく誦することが出來るかも知れぬ。が而し正邪善惡の裏にはまるで荒野に路を忘れた羊の子のやうに、または人に最も高貴なりと敎へられた制限と云ものに出火しては迷された。迷はした第一の者は逸樂的な美しい女の白い腕や顏だつた。俺れは考へた。考へてはまた迷つた。考へに考へた末が是れは女の罪ではなくて是の兩つの眼の罪、焦点は俺れの眼にあると思つて盲目の輩となり複雜なる人生の問題を一朝にして單簡の問題に決定しやうと考へた。が弱い子の努力は遂に薄弱で陋い生活を續けねばならぬ運命を具有してゐる。制限克己を笑つた俺れは制限の絆にはだされ、己に克つことの出來なかつた人の子は無闇に人や物やに壓倒されたんだ。陋いものとは知り乍らも弱い服從に走らねばならなかつた。世の慣習と拘泥とを笑つたものの俺れはあの偉人な運命の上に立つやうな强い人間でもなんでもなかつた。……俺れは是の世の黑白を分けて然る

か否かの二語を以て一刀南斷の態度に出たが是をまだ發展させると生きるか死ぬるかの問題だ。眼は盲いても心がある唯一時の狂氣にこの眼をつぶした一匹の羊は複雜な問題を愈複雜にしてしまつた譯だ。唯二つの眼の爲に俺れの頭腦は永久に休むまもない働きいに陷つた。

艶なる女。あのあなたを迷せたとれ仰る美しい膚の女は恁う云ふ妾のことでせうね。妾は隨分あの時分は美しかつたわ。

盲目の僧。勿論れ前だ。れ前の爲に俺れは肉身の親父に堪當までされた。それにれ前は無下に無情かつたではないか。

艶なる女。無情かつたと。妾も其の時分は迷つてゐたわ。美しい二つの玩弄物をもつて運命はどれか一つを取れと云ふの。そのくせ二つとも氣に入つてゐたのよ。(間)ちいと、あの小僧さんはあれにゐますの眼い兎のやうな顏をして。

二の小僧艶なる女を見出し戀さ堪へざるものゝ如く馳け寄る一の僧恨むが如く見むくる。一及二の漁夫火に箕坐して眠る鼾聲低し。

二の小僧。美しい姉さん一つの吐息もせないで丁度百年待つたよ。あの花に吐息がかゝると萎びはしないかと思つて。

艶なる女。(艶やかに)れや。れや。恁麼所に夜闌けて何でせう。和尙樣と御迎にあがつてよ。あれ、あそこで一寸休みませう。

一の小僧。(怪しき星を指して)和尙樣あの東南の靑白い人魂のやうに光つてゐる星が見えますか。

盲目の僧。俺れは盲目で何麼色だか見別か付かぬがその星の燃燒してゐる音が好く耳に入る。

一の小僧。あの星は先きに血のやうに赤く爛れて居たのです。見てゐる内に光の色が變ります怪訝極る星です。漁夫の云ふにあの山の上の池の畔にゐる惡魔の祝宴の表徵ださうです。あの（暫く耳くかたむけ）酒宴の酒くさい歌聲が聞ゐませう。

盲目の僧。うむ。聞ゐる。聞ゐる、小惡魔かそのまわりに舞踏してゐる足音も聞ゐる。歡しい輕い足音だが妙に深い足音をこの俺れの心につくるやうだ。あゝ歌つてゐる。

「俺れは人間の澁い肉にはこりこりだが
赤い血の葡萄酒は棄てることが出來ない。
あれを飲むと心か舞踏を初め黑い夢の主が、
世界に探したつてない苦い顏をする。
そうしてまた、裏の山の倉に、
瓶つめにした青い女の啜り泣き、
俺れは何だか喜しくてたまらない。
春雨か新緑の草木にそゝぐときの
草木の心のやうに。
緊張した、肉塊の、かすかになよびやかに、
緩みゆく歡聲のやうにも。」と。

何と云ふ凄まじい鼻いきなんだらう。

一の水夫。（突然目覺め蹶起して）あの女も惡魔か。口をつけやうかと言つてゐます。

二の小僧　艶なる女に抱き入り鈍き眼を眸つて動かず。艶なる女手を放たんとして悶く。

艶なる女。何と執心な小僧だらう。是の妾を娛み物にの惡らだらうか。まさか。……放してたくれ放して。

二の小僧。厭だ厭だ厭だ。百年食はす、寢ねずに朝夕待つた姉さん。後生だから姉さんた前の赤い血を吸つて終ふまで。……

艶なる女色青ざめ倒れんとす　一の小僧一の水夫走り助けんとす。

一の小僧。何だと、た前は好くも人をたばかつた。唯俺れは美しい感情をもつたに、小供と思つたた前は惡魔の子だつたな。畜生ッ。

一の漁夫。（盲目の僧の杖をとり來りしたゝかに一の小僧の手を打ちて女を放たしむ盲目の僧物言に驚く）放せッ、放さぬかッ！

二の小僧。（痛みに堪へず手を放ち草叢の方に走り入り乍ら）好くも打つたな。俺れの手か放るゝ時は奴等の命の緒の切れる時だ。覺えて居ろ夜の明けぬ内にあの山の魔王の酒と下物にしてらあ。

四人の者。（皆一樣に互に相視み驚き呻るか如き聲にて）俺らの命か今夜の中に……。

暫時無言　靜なる沈默續く。吐息多く悲しき思入れ、二の水夫寢入りて未だ覺めず焚火の思い出したるが如く暫く燃に上る。

盲目の僧。足音か聞ゐるまたしても足音か。近い草叢の中から。

一の小僧。惡魔か俺らの命を。……

一の漁夫。或は。だかまだ嗄かれた彼の歌聲はいつも海を越へて吹く嵐の吐息のやうに止まぬわア。

足音漸次に近く強く。

一の小僧。死の歩のやうだ。

一の水夫。否々時の歩調のやうにも聞ける。

盲目の僧。無極の鐵道の上を永刼に平行に走る時と死との輪の音だ。

艶なる女。愈れ別れの日かまいりました。

盲目の僧。否々。世界は續く時は直線だ。死は直線の區劃で靈魂は輪廻の法ださうだ。吾々の世界は是に三度回轉する。一度は鮮かなる派手な六波羅の空氣を吸い再び生れて惡魔の國に朝晩黄ろい歌をきかされた。先きの世に戀に浮名を流し花に迷ふて畢竟結實の誠を見ず、次の是の世に赤き誠の心を味つたか美しいれ前の色は見ることが出來なんだ。虚空をとぶ木の葉が地に墜つる限り晝夜東注し去る水の心の低きに就く限りは、是もまたのがれ得ぬ宿命なんだらう。俺れは唯た祈つて悲しむまい。さうして運命と共に水の如くに流れやう。吾々の生活は一歩後にあると云ふのは惡だ。回轉せよ進行せよ變化ある生活、一歩一歩に進み得る生活。Xは趣味だ變化は發達なんだ。吾々は唯だ永刼に運命と共に行かねばならぬ。行き乍ら俺れは刹那々々の感情の呼吸に生きやう。物の出發点は個性だと云ふ。汝の意志は自由なりと云ふ。が全能の物の前にはどうしても世界は動物園なんだ。運命運命これ程大きい名を嘗て聞いたためしかない。

艶なる女。では甘んじて惡魔の口を通りぬけた人生を見たいとれ云いですか。妾らはまた、世の人の夢に生

きるやうになりましたのね「罪ではないのでせうか靜かな人の夢をかき亂すなんて。だかいゝわね
ね人が古い私達の夢を見てゐるまにまた先の新らしい空氣を吸つて古い歩みののろい人間を冷笑
してやりませう。……まだ納戸色の傘位(パラソル)で滿足してゐられる人達は幸いですよ。(間)妾の
心は漲きる泉のやうに絶へずあなたのために生きるのですね、はげしい世の戰に傷いたら歸つて
妾の泉にて洗ひなさい。妾の泉はいつでも準備してありますわ。

足音高く松の木の蔭に歩み依る巡禮の女あり暗くして顏容年齡詳かならざれどもかすかに嘲笑を面に浮ぶ

一の漁夫。誰だ。

巡禮の女。妾ですわ。

盲目の女。聞いたことのある聲だなあ。

艶なる女。妾もさう聞いたことのある聲ですよ。

巡禮の女出て來る頭に笠を冠り白き布を前面に垂れ蓆を背に脚胖をつけ草鞋を穿つ年殆と古稀に近し。

巡禮の女。横笛樣暫くでした。

艶なる女。(横笛)(不快の顏色)冷泉樣まアどうして是に。

巡禮の女。(冷泉)(嘲笑を帶び)瀧口樣も御一所に晴れての御夫婦(めうと)か。わ羨めしう御座います。

盲目の僧。(瀧口)(怒れるが如き面持ち)冷泉何と。

艶なる女。冷泉樣もう丑滿にまもありますまい。さつさと御いでなさい。夜か明けさうよ。

巡禮の女。では御機嫌好う

瀧口と横笛とを等分に見て冷笑して去る

二の漁夫。（初めて眼さめ人々を見て驚く。一の漁夫に向ひ）もう一體何時頃だらう。

一の漁夫。月か西の山の端に懸つたので丑滿時にまもあるまい。

二の漁夫。徐々歸らうか。

一の漁夫。否々歸る前にた前の命は置いて行かねばなるまい。

二の漁夫。何と。（不解の表情宜しく）

是の時山麓より草叢にかれて俄に惡寒の兵の寄する足跡鏘然たる金物の相觸れ鳴る響。叫聲。一の小僧兩手を組んで冥想し瀧口は横笛に手を與へ横笛は瀧口を注視す。笑いかすか也。一の漁夫は焚火の跡に首を垂れたるまゝ。二の漁夫驚き走り出さんとして。

幕。　（五月十日稿）

磯

精樹

瀧一は叔母が出して呉れた義叔父の浴衣をひつかけて、ぶら〳〵と磯へ向つて出かけた。おさげにした根元を大きなリボンでくゝつた豐ちやんと芳ちやんとが手を引かれてついて行く。義叔父の氣質を受けついで大樣な子である。久しぶりに昨日やつて來た瀧一に、すぐなついて、繪をかいて頂戴と今日は朝からねだつた。そう〳〵てどう〳〵二三枚なすらせた。今もしやちこばつた浴衣姿がをか〳〵いと二人で笑ひかはしてつい